

精神科学的教育学から人間の本質を捉える

山 崎 英 則

ディルタイは『精神科学序説』(1883)の中で生の哲学を前提とした精神科学の体系的な基礎づけを行っている。彼は知覚, 思惟, 論理学, 意識, 省察, 思慮について明らかにしていく。彼の場合, 生こそが哲学の出発点であった。彼の弟子のシュプランガーは生のプロセスを有意義的な連関として, 精神科学的心理学に基づく精神科学的教育学を構築した。

この論文では, 生の哲学者の代表的存在である2人に焦点を合わせて, 人間学とそれによる教育論を紹介し, その応用可能性について探っていきたい。

第一節 ディルタイの生の解釈

生の解釈は, 最初, テーテンスによって行われた。彼はヴォルフの2分法に感情を加え, 生を認識(思惟), 欲求(意志), そして感情から成立すると捉えた。

その考え方を受けて, ディルタイは生を精神と定義づけ, 構成要素として, 知性, 感情, 意志をあげ, そして, 機能要素として, 体験, 追体験, 理解, 表現をあげている。

構成要素について

構成要素とは, 人間を静的に捉えているものとして位置づけることができる。

彼によれば, 知性とは, 知識の客観的妥当性を要求する意識の統一作用であり, 感情とは, 自分自身および他人の特性の中に入り込んで内から捉える働きであり, そして意志とは一つの事実の実現への指向である。

われわれは嘘の内容については知りたくない。できればわれわれは本当のことを知りたい。さらにいえば, われわれは一部の人々が信じている知識ではなく, すべての人々がそのことを真理として捉えている本物の知識を吸収していきたい。これが人間の本性である。ディルタイのいう知性にはこのような特徴が隠されている。

われわれはいま, 自分自身の感情がどのような状態であるかを他の人にいうことができる。たとえば, 沈んでいるのか, 高ぶっているのか, 平静であるのかなどと。そして, 身近にいる人とのコミュニケーションを通して, 相手の感情の中に入っていき, その状態を推し量ること

ができる。沈んでいるのか、高ぶっているのか、平静であるかなどと。自分や他人の感情に入り、その状態について捉えることができるとするのがディルタイの感情論の特徴である。

意志の強固な人もいれば、逆に意志薄弱の人もいる。意志の強固な人は目的が限定され、一つのことを追求している場合が少なくない。意志薄弱な人は達成したいことが多くあり、選択に困っている場合が少なくない。実現可能性の有無を問題にした場合、多くの目的を掲げるよりも数少ない目的を掲げ、それに集中した方がよい。いずれにせよ、目的を実現していく原動力は意志以外にはない。この世の中で、意志を機能させることなく実現されたものはまったくないといっても過言ではない。このような捉え方をしているのが彼の意志論の特徴である。

機能要素について

機能要素とは、人間を動的に捉え方しているものとして位置づけることができる。

彼によれば、体験とは、生命をそこに投げかけ、生命をもってそのことを受け止めることをいう。追体験とは、自己の内的世界において対象を創造することをいう。理解とは、体験および積み重ねられた知識を前提として行われる作用のことをいう。そして、表現とは、すでに体験した主観的なものが客観化されたものをいい、その表現されたものを通してのみ、自己および他者の心情などを理解することができる。

体験とは、自分自身の身体、自分自身の精神、自分自身の生命を対象に直接投げかけ、その対象がどのような特徴をもっているのかを捉えて帰ってくる働きをいう。自身自身が主語となる限り、捉えて帰ってきた内容は主観的な性格を帯びていることはいうまでもない。つまり、体験とは、感覚、表象、感情、意志の動きといったさまざまな要素が結びついている生の最小の統一体のことをいうのである。

追体験とは、上記の、捉えて帰ってきた内容を自分自身の生の中でもう一度反芻して、その内容に深さや広さを付け加えることをいう。すなわち、追体験によって、主観的な内容は一段と主観的な内容になっていくことが理解される。

理解とは、自分の身体や精神や生命でもって体験した主観的な貯えと、すべての人々が真理として位置づけた客観的な知識の蓄積によって、対象の本質的な特徴を明らかにすることをいう。彼は、この理解を基本的理解と高次の理解とに分けている。基本的理解とは、対象の中に共通性が発見されるときに成立し、高次の理解とは、共通性が発見されず、根源にまで遡ることを要求する理解をいう。

表現とは、過去、体験を通して自己の内部に貯えられものがいろいろな形を通して、外部に現れてきたものをいう。したがって、表現には人間の言動のすべてが含まれることになる。具体的には、絵画、音楽、写真、小説、論文、手紙などがあげられる。われわれ人間は、それらを通して、それらを書いたり撮ったり人の心の中や精神の中を覗くことができる。また、われわれ人間は、それらを通して、かつて自分が書いたり撮ったりしたときの自分の中や自分の精

神の中を覗き込む、思い出すことができる。なぜなら、表現された物の中には、人間の意志や意図が含まれているからである。彼は表現を次のように定義づけている。論理的・言語的形成物、行為もしくは活動、体験の表現化、と。

三位一体である体験、理解、表現は彼の晩年の哲学の中に集約されている。①体験は消え去るため、把握しにくい。体験が固定されるのは表現においてである。②人間の生の諸々の可能性についての普遍妥当的な認識に到達することは難しい。したがって、生が表現されている客観態を経由する方法が妥当な方法となる。③ある作品のように、最も単純な姿で現れている体験の表現でも、多くの心的連関を含んでいるため、創造的な特性へと通じている。

この事実から、次のことが理解される。ディルタイは生の偉大な生産性、人間の歴史的存在を強調している。人間とは未来に向けて生きることを通して、幸福の感情をもちうる存在である。

一般に、人間を捉えるとき、静的に捉えるかそれとも動的に捉えるかによって、方法は違ってくる。

まず、静的に捉えるとき、ディルタイの人間観を参考にすると、メルクマールとして、知(性)・(感)情・意(志)の3つの観点が導き出される。人間を3つの観点から考察するとき、人間の社会では、人間をとかく知のみで評価する傾向にある。偏差値による進学指導、詰め込み教育に重点を置く学力主義がそのことを如実に示している。しかし、人間は、情緒面での豊かさ、すなわち、優しさ、穏やかさ、心配りなどの面からも評価されなければならないし、また、意志の面での豊かさ、すなわち、意欲、意気地、意図などの面からも評価されなければならない。つまり、人間は知・情・意という3つの力の総合的な観点から捉えられなければならないのである。

次に、動的に捉えるとき、ディルタイの人間観を参考にすると、メルクマールとして、体験を、しかも直接体験を大いにさせることが導き出される。なぜなら、体験さえしっかりさせておけば、それをベースにして、追体験はもとより、理解や表現は容易に可能になるからである。体験することは決して難しいことではない。なぜなら、もともと人間に備わっている五感をフルに機能させれば、そのこと自体が体験と結びついているからである。見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れる時間を確保さえすればそれでよいのである。しかし、体験は、結果的には、主観的なレベルに留まっているものであるから、客観的なレベルにもっていくことを考えなければならない。主観的レベルから客観的レベルへと移行させ方法として、専門家や彼らの書いた書籍、種々様々な情報やデータなどを利用すること、すなわち、それらとコミュニケーションをすることが考えられる。まずは体験をさせること、その後、他とのコミュニケーションを経験させることを考慮すればよいことになる。ちなみに、経験とは、自己の体験と他者の体験の総和のことをいう。

第二節 シュプランガーの人間観

シュプランガーは1924年、「人間とは一体いかなる存在であるのか」に答える形で、『生の形式』を著した。彼はその中で、主観と客観との連関の中で、自我をどのように働かすかによって、すなわち、対象をどのように解釈するかによって、六つの人間類型が導き出されるという。それらは、①理論的人間、②経済的人間、③審美的人間、④宗教的人間、⑤権力的人間、⑥社会的人間、である。

彼の場合、主観とは主観的精神のことであり、客観とは客観的精神、すなわち、客観化された精神、規範的精神、共通精神のことである。客観化された精神とは、内なるものが外に現れ、ある形をもったものをいい、もしそこに普遍的な価値や意味が認められれば、その時点で客観的精神となる。規範的精神とは、慣習、道徳、法、政治的秩序をいい、そして、共通精神とは、集団精神のことであり、家庭や組合などで共有されている精神のことをいう。共通精神の典型的な例として、帰属意識があげられる。

自我とは、客観的精神の中にある価値や意味に対して機能し、主観的精神を特色づけると同時に人間全体を特色づける働きをもっているものをいう。

理論的人間とは、理論的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のことをいい、真の価値が支配している人間のことをいう。理論的人間は理論的なものを発見することによって歓喜する。彼は無時間的な世界の中に生き、広い未来を展望する視野をもっている。彼は思慮深く、物事を合理的に考える。彼は普遍妥当的な客観的法則性を目標にするため、無感動を旨とする。彼は神もしくは宗教的なものを、認識そのものが漸次、純化されていく過程において感じる。典型的な例として、学者や物事を深く考える人をあげることができる。

経済的人間とは、経済的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のことをいい、利・効用の価値が支配している人間のことをいう。経済的人間最大限の効果的な結果を得るために、効用性の価値を優先させる。彼は自己の発展を合目的な適応の結果とみなす。彼は経済的合理主義、経済的悟性のもで現実に近い関係にある。この経済的類型の墮落したものととして消費者と節約家が考えられる。典型的な例として、商売をしている人や会社を営んでいる人をあげることができる。

審美的人間とは、審美的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のことをいい、美の価値が支配している人間のことをいう。審美的人間は豊かな想像力を行使し、世界とつねに情熱的に接触する。彼は直観的な豊かさのもとで、対象との美的体験、すなわち、印象を表現へと形作る。彼はたましいのこもった形式の持ち主ゆえに、無拘束性と想像性を旨とする。彼は経済的な諸条件に対しては無関心であり、無力である。典型的な例として、芸術家（美術家、音楽家）をあげることができる。

宗教的人間とは、宗教的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のこと

をいい、聖の価値が支配している人間のことをいう。宗教的人間は精神的構造が、最高の、余すところなく満足させる価値体験の産出に永続的に向けられている。彼は自己の宗教性をもつタイプと踏襲的な宗教性をもつタイプに分けられる。彼は超越的な神秘主義者か内在的な神秘主義者のどちらかである。典型的な例として、宗教家をあげることができる。

権力的人間とは、権力的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のことをいい、権力の価値が支配している人間のことをいう。権力的人間はあらゆる対象を支配の前提に認識していく。彼は超個人的権力の全体のために身を捧げ、現世の営みにおける外面的な成果を崇拝する。彼は自らの権力を全体への奉仕にのみ行使し、それを自ら従う者に対する倫理的義務とみなす。典型的な例として、政治家をあげることができる。

社会的人間とは、社会的作用を行う自我の旺盛な働きによって導き出される人間類型のことをいい、愛の価値が支配している人間のことをいう。社会的人間は完全に他人のうちに自分を感じ、また、このことによって、他人をほとんど他人として認めない。彼は愛、献身、犠牲を通して、自己自身が高められることに満足を覚える。彼は自由意志的な人間愛の力を信じるがゆえに、強制力をもった法令に無関心となる。この典型的な人物として、教育家のペスタロッチや学者のフィヒテをあげることができ、さらに、この典型的な例として、公務員をあげることができる。

上記の中で、個人的類型の中に入れられる人間は、理論的人間、経済的人間、審美的人間、そして宗教的人間であり、社会的類型の中に入れられる人間は、権力的人間、社会的人間である。

上記の六類型は、これから、主観的精神が客観的精神との連関を通して到達すべき理想として位置づけることができる。その場合、六つの中から一つを選択する方法が考えられる。しかし、シュプランガーはその方法以外に、全部を選択の対象に入れる方法を考えることを進言している。なぜなら、生活の中では、あらゆる状況の中で、いずれかの類型になりきって対処しなければならないからである。

さらに、彼は上記の六つの類型の中に入れられない、六つの類型のすべてに関わる類型を導き出している。それは、倫理的・道徳的人間である。なぜなら、倫理的・道徳的人間は、理想としての類型であると同時に、人間が人間として生きていく限りは、その類型をベースに据えておかなければならない類型であるからである。

彼の場合、倫理とは個人的エートスのことをいい、道徳とは社会的モラルのことをいう。個人的エートスとは道徳性のことであり、社会的モラルとは道徳律のことである。道徳性とは、個人の内的な体験に基づいて形成される価値の世界であるため、内面的道徳として捉えることができる。道徳律とは、社会や集団の中に存在する規範の総体であるため、外的道徳として捉えることができる。前者の主体的規範と後者の社会的規範との関わりの結果が道徳的な言動となったり非道徳的な言動となったりする。

子どもを捉える場合、まず、彼らの精神の中で、六つの自我のうちどの自我が一番旺盛なのか、さらには、一番旺盛な自我をどのような対象に向けて働かしているのか見きわめていけば、子どもの現在の思考や想像内容について、さらには、子どものこれからの思考や想像内容について、おおよそ理解することができるであろう。次に、子どもの六つの類型すべての定着を図るのであれば、それぞれの子どもの特徴から判断して、欠けている類型、したがって、身につけて欲しい類型を、機会を見つけては提示しさえすればよいのである。

六つの類型の中の一つの類型の追求・実現において、そして、六つの類型すべての追求・実現において、忘れてならないことは、道徳的な人間類型であり、倫理的な人間類型である。人間である限り、自己に中での道徳性を、そして、社会の中での道徳律を考慮しなければならない。彼によれば、それらの両世界の調整を行うのが良心である。良心とは、他に対してとった言動を自己の内面における是非・善悪・美醜の基準に従って判断していくところである。良心が主観と客観とに関わっている限り、子どもの言動を指導していく場合、外面と内面との同一や差異に気をつけなければならないであろう。

ところで、シュプランガーは「人間としてのあり方」に言及している。それらの重要な内容について紹介しておこう。

①愛とは

現在、人間は、人間との、事物との、そして絶対的なものとの間において、はっきりした興味や関心を示していないため、両者の間に大きなそして深い溝、すなわち、間や距離を作っている。そのため、彼はまず、愛に対して開かれるべきであること、さらには、間を結びつけることのできる愛によって、溝である間や距離を埋めるべきであることを提言する。そして、彼は、人間について、エロスを働かせることによって、自分の理想を追求し、人間を形成することを強調する。次に彼は、人間を段階的に上昇させる愛を行使すべきであることを提案する。なぜなら、人間は、絶対的なものに対して興味や関心を示すことなく、したがって、形而上的な関係をもたないまま生きているからである。最後に彼は、神的な根源の統一に再び連れ戻し、人生に豊かさや深さを与え、幸せに過ごすことを可能にする愛の行使を主張する。

つまり、愛は我欲を消滅させ、統一へと導き、生成する者に最高の幸せを実現するものである。シュプランガーは両者間の溝を結合していくことのできる愛によって、水平的距離と垂直的距離を縮めるべきであること、埋めるべきであることを強調しているのである。

②自己自身との交わりについて

人間は誰でも、いったん、自己自身との交わりが始めれば、それから逃れることはできない。発達段階において、思春期の目覚めはそのことを証明している。

人間は自己の外部と自己の内部と交わることができる。自己の外部の世界には心を虜にするものが多く存在する。それに対して、自己の内部の世界にはそのようなものはあまり多くはな

い。したがって、人間は自己の内部の世界とはあまり関わりたがらない。自己逃避するのは自然の成り行きと捉えられる。しかし、人間は自己自身との真剣な交わりを通してのみ、真正な自己啓発、より高い人間性形成を行うことができる。そのことを真面目に行っていない人間のことを、シュプランガーは群衆的人間と呼んでいる。つまり、彼は群衆的人間にならない唯一の方法として、自己自身と真面目に交わる方法を提示しているのである。ちなみに、彼のいう群衆的人間とは、浮き草のようにはっきりした目的をもっておらず、付和雷同的な言動をとり、外部からの影響をもろに受けやすい人間のことである。

③たましいとは

彼はたましいについて次のように捉えている。たましいは、自己自身と孤独な対話の中で自分自身を知ることができる。たましいは、環境のさまざまな価値や意味と外面的連関および内面的連関を保持する。たましいは、変革、回心によって、形式を純化する。たましいは、超時間的・超空間的な世界を開示・実現することを目標にする。たましいは、自己の内に、精神的に自らを維持しようとする衝動をもっている。

つまり、たましいとは、真正や真実へと導いていく根源であり、より高い生への要求、人間的生に対する当為が起こるところである。

④日常の成熟とは

シュプランガーの場合、成熟とは、職業を完全に遂行していく中で行われる。彼は成熟の条件をあげている。ある程度の緊張をすること、寛容なる態度をとること、倫理（エートス）を大切にすること、精神を作用させること、生を完全に具象化すること、神的なものを予感することができること、である。そして、彼は生の形成の条件をあげている。意味ある労働をすること、連関を重視すること、自己規律の方法を学ぶこと、である。

つまり、成熟がスムーズに行われるためには、学び直すことを恥じないこと、良心を機能させること、種々の特性を実践すること、倫理的決断を行うこと、調和を求めること、冷静沈着な心をもつこと、内面的勝利をめざすことであることが理解される。

⑤形成と発展とは

シュプランガーは形成の原理と発展の原理を明らかにしている。形成の原理とは、年齢とともに自然に変化していく自然的なメタモルフォーゼ（変性）のことをいい、発展の原理とは、環境や運命と活動的に協働することによって変化していく倫理的メタモルフォーゼのことをいう。

彼は自己形成を、個人性、全面性（普遍性）、総体性から捉えている。個人性とは人間性を形成する根源的なものであり、全面性（普遍性）とは内面的な財を豊かにする陶冶力によって支えられているものであり、そして、総体性とは最高の生への憧憬によって形成されるものである。

形成および発展において重要なことは、到達したところで満足するのではなく、永遠の理想

主義に立つこと、すなわち、いつも「死して成れ」をモットーにすることである。

⑥想像の力について

彼によれば、想像とは、現象する感覚界から生ずる意識要素を新たな像に向けて形成することをいう。彼は想像の特色として次のことをあげている。死せるものを蘇生させる、時間的なものに永遠なるものを与える、有限的なものに無限なるものをしみこませる、神秘を予感させ生のあらゆる瞬間を無限の刺激を与える。

想像力が旺盛になる時期は子どものときである。とりわけ想像力は母子の関係の中で育てられる。その関係から生まれた子どもの想像力は、現在の科学の発展を背景から支えている。その意味で、彼は子どもの想像力やそれに基づく独創力を着実に形成するために、母親が子どもに対し、対象について解釈すること、感銘づけることがいかに大切であるかを述べている。

⑦女性について

彼は女性の特徴を男性のそれとの比較を通して浮き彫りにしている。女性は、すべての生あるものに対して、より本源的な親近感を感じる。女性は、小断面の内容を深い全体意識のうちに引き下ろす。女性は、天賦豊かな女教師である。また、彼は女性のあり方を提言している。女性をつねに自分自身を全体的に感じなければならない。女性は全面的に献身し、自己発見する職業において幸福になることができる。女性は自分の究極の基準を、自分の完成された女性らしさのうちに見出すべきである。

つまり、彼は、真の女性の条件を導き出している。完成された女らしさを身につけ、それらを音楽のように作用させるべきである、と。

⑧人格的決断の倫理について

有限的な存在である人間は、意識する限り、価値実現へと向かわざるをえない。価値追求・獲得において重要になる用件は、客観的により高い価値を意識することである。

人間は新しい人間へと旅だっていくことができるが、そのとき重要になるのは、自己否定、自己拒絶であり、良心の声であり、新たな決断である。彼は生きる根拠である意欲、必然、当為の中で、特に当為が最も重要であるという。なぜなら、当為はわれわれがすでにあることや意欲するものを超え出て、教示するからである。当為は価値を倫理的な意味において、確認し、より高い世界への入り口を開放するからである。

人格が形成されるときは、自由をもとに、自己創造的な意欲を燃やし、最高の客観的価値を志向するときである。

⑨責任について

人間は、生きていく限り、自己形成において、文化の担い手において、倫理や道徳において、果たさなければならない多くの課題を抱えている。彼によれば、それらの期待に応えられない人間は無責任な人間、すなわち、群衆的人間という。彼らは、一つの組織の中で単にせざるをえない人間のことであり、文化過程に対する責任を担うことを知らない人間のことであり、決

断して未来に入り込む意欲をあえてもたない人間のことをいう。

彼は提案する。文化の特徴を理解しよう、文化に対して倫理的な文化的良心をもとう、精神的・倫理的な財に対して責任をもとう、真正で正直な文化規範を自己の中にもとう、独自の人格と倫理的決断の自由をもとう、人間の精神面での訓練や努力を怠らないようにしよう、と。

彼は人間としての責任ある言動に大きな期待をかけている。なぜなら、文化は人間によってのみ維持され、繁栄し、発展するからである。人間のあるべき姿がここに発見されるのである。

⑩時間と永遠について

シュプランガーによれば、精神的な生命としての人間の生は、諸々の担い手である。この事実、人間がより高いもの、もっと高いもの、最も高いものを追求し、永遠なものを目指して生きていることから証明される。しかし、人間にとって最も悲劇的な運命は、死を迎えることによって無に帰せられることである。死を最後の段階にしない方法として、「死して成れ」が位置づけられる。そのことがわれわれのたましいの中で起きているとする者が、シュプランガーである。

彼はたましいに次の特徴を認めている。現世と来世との魔術的な出会いが繰り返し行われるところであり、因果関係が支配するのではなく、最も聖なる変化が生起するところであり、そして自分のために一切を逆転させる力をもっているところである。なぜなら、たましいにおいて神が体験されるからである。彼は、たましいの中に神そのものを宿らせる準備をしておくこと、そして、神の愛を受け入れたいのであれば、心を純粹にしておくことを指摘する。

人間は一人で生きていくこともできるが、時々しんどいと感じられるときもある。そのとき、神がそばに存在してくれれば、よりよい方向へと適宜アドバイスをしてくれるであろう。彼が希望する人間の生き方は心に神を関係づけることである。

現代の人間は、目を外にばかり向け、内の自分自身の中にあまり向けていない。なぜなら、矛先を内に向け自分自身の過去を振り返るとき、苦しいことばかりを味わわなければならないからである。シュプランガーはその苦しさを和らげるように、含蓄の多いことばを使って優しくアドバイスしている。愛を前提にして繋がりを確認してごらん、自己自身と真剣に交わってごらん、たましいの機能を再確認してごらん、内面的勝利を目指してごらん、自己自身のメタモルフォーゼを考えてごらん、いろいろな対象について様々に解釈してごらん、自己を全体的に感じてごらん、自己否定・自己拒絶して超越してごらん、目に見えない期待に気づいてごらん、心を純粹に保持して生活してごらん、というふうに。

自分自身が人間としてのあり方を求めていくとき、彼のアドバイスは大いに参考になることであろう。そして、自分が目的を真剣になって求めていく姿は、後輩の人間としてのあり方に自ずと影響を及ぼすことであろう。漸次、その枠の拡大化もシュプランガーが望んでいることであると確信している。

第三節 シュプランガーの教育観(1)

1 教育の定義

まず、シュプランガーは教育を3つの側面、すなわち、①発達の援助、②文化財の伝達、③良心の覚醒、から定義づけている。

発達の援助について。この定義は、人間とは、とりもなおさず、生物的な存在であるため、発達する精神的な面と身体的な面とにおいて、援助が必要であるとする考えである。

文化財の伝達について。この定義は、長い歴史の中で人類によって創造・蓄積されてきた文化遺産を、次の世代へと伝達すべきであるとする考えである。ただし、この伝達は、文化財を単に伝達すること、いわゆるたましいという容器の中へただ単に受動的に知識を詰め込んでいくことだけではなく、自己発展するたましいが、創造的、能動的に協働しながら知識を受容していく過程を意味している。

良心の覚醒について。この定義は、青少年の内奥に存在している良心を目覚めさせようとする考えである。この定義は、上記の2つと比べて、最も重要でかつ最も困難なものであり、彼が最も強調している教育の目標でもある。なぜなら、教育者は良心を外から植え付けることはできないからである。青少年が自ら目覚めてくるのを側面から援助することができるにすぎないからである。側面から援助することとは、取り出すこと、救い出すこと、公にすること、蘇生させることである。ソクラテスによって明確に特色づけられた産婆法によるため、彼はソクラテスの考え方の賢明さを指摘している。

ところで、彼の良心論においては、その捉え方に特徴がある。彼は良心論を人間的な側面からと神的な側面から考察している。機能するのは人間の内面においてであるが、良心の声は神からの声であるとして、神をそこに存在させている。すなわち、彼の場合、自律的理論と神律的理論とが同居しているのである。そして、彼は良心の上にもう一つの良心を認めている。良心の良心である。なぜなら、良心といえども、主観的な考え方で判断しているからである。さらに、その理由は、その主観的な考え方をできるだけ客観的にすることにある。そして、彼は良心教育の可能性について二段階を考えている。第一段階が「良心への教育」であり、第二段階が「良心の教育」である。第一段階の「良心への教育」では、教育学的な標準を通して、まだ一度も目覚めていない良心を目覚めさせるように促進していくことを目的としており、そして、第二段階の「良心の教育」では、一度目覚めた良心に対して、内なる声に聞き耳を立てて、良心が正しく機能するように促進していくことを目的としている。

2 人間らしさへの教育

次に、シュプランガーは論文「人間らしさへの教育」(1952)を著し、人間らしさに言及している。彼によれば、人間らしさとは、①自己省察、②自己評価・自己批判、③良心、④責任

意識、⑤愛、である。これら5つは、人間の原点としての、公約数としての、共通分母としての内容である。すなわち、これら5つの内容は、人間が人間として生きていく限り、誰でも備えておかなければならないものである。

まず、自己省察について。自己省察とは、矛先を自分自身に向け、自分自身が一体どのような存在であるかがわかることをいう。自己省察へと至らしめる方法として、内観法が考えられる。

次に、自己評価・自己批判について。自己評価とは、いまの自分の吸収してきた内容が十分であるかそれとも不十分であるかを自分で評価することをいう。自己批判とは、その後、吸収してきた内容が不十分であれば、その原因がどこにあるのかを厳しく突き止め、そこから理想へと接近するきっかけを得ることをいう。理想と照合する方法や神に直面させる方法が考えられる。

次に、良心について。良心とは、他に対して行った言動が良かったか悪かったかを自己判断するところである。人間の本性の中に先天的に内在すると見る彼は、生活状況の中で具体的な生き方を秘かに効かせる方法を考えている。

次に、責任意識について。責任意識とは、目に見えない多くの方々からの期待に答えているとき、責任遂行しているといい、逆に、それらの期待に答えていないとき、無責任という。道徳的視野を拡大し、道徳的意識を高め強める方法や仕事や人間に奉仕させる方法が考えられる。

そして最後に、愛について。愛とは、好意を寄せることであり、許すことであり、認めることであり、与えることであり、奪うことである。つまり、愛とは繋がりである。愛を芽生えさせる方法としては、宇宙の中で自分を自覚させる方法、愛によって結びついた生活を実践させる方法が考えられる。

この配列の仕方にある法則が隠されていることに気づく。③から①へ向かうに従って、主観的な色彩を強め、そして、③～⑤へ向かうに従って、客観的な色彩を強めている。つまり、①～⑤への過程は、主観的なものから客観的なものへと配列され、逆に、⑤～①への過程は、客観的なものから主観的なものへと配列されている。そして、丁度、中間に位置づけられた③の良心においては、主観と客観のどちらの性格も同居させている。「他に対して行った言動」は客観的な側面であり、そのことを自分の基準に従って判断することは、主観的な側面である。つまり、良心の機能については、彼の場合、主観的な側面と客観的な側面とから説明していることになる。

3 教育者とは

ドイツでは、かつて、教員養成に関して、総合大学で行うかそれとも教育大学で行うかの問題が浮上したことがあった。シュプランガーはすべての教員養成までも総合大学に任せようとする考え方に対して、反対する。なぜなら、本来あるべき国民教育教員の養成がまったく偏っ

た軌道に乗せられているからであり、総合大学が本来の本質的文化目的を促進することから遠ざかってしまうからである。

そもそも、総合大学は学者を養成することを第一の目的としている。そして、教育大学は一つの職業である教員の養成を目的としている。理想としては、両大学が、世間で評価されている上下関係に惑わされることなく、相互に歩み寄り、総合大学でも教員養成が可能となり、教育大学でも特殊な学問的研究を行うことができることであろう。しかし、実際には、実地の教育が非常に困難とならざるをえないことから、彼はこのような考え方に反対している。

彼は教員に対して次のような考え方をしている。教員は、生きた人間に対する感覚が必要になる、陶冶価値に対する感覚を発達させなければならない、学者的教師であってはならない、全体的人間であるべきである、と。

さらに、シュプランガーは教育者の特徴について本格的に考察している。『生まれながらの教育者』（1958）の中において、である。紹介してみよう。

- ①教育者は人間教育に魅力を感じる者であるべきである。
- ②教育者は教育理想を時代などを考慮して明確に打ち出す者であるべきである。
- ③教育者は事物や実践の中で、心そのものを優先させる信仰をもっていなければならない。
- ④教育者は教育愛を行使して、個々の人間を教育的な人間へと生成しなければならない。
- ⑤教育者は良心の覚醒を教育の最も重要な目的および目標にすべきである。
- ⑥教育者は自己省察および自己訓練を高い程度においてできなくてはならない。
- ⑦教育者は陶冶財を自由に噛み砕くことができなくてはならない。
- ⑧教育者は学校を外面的に強制するものにしてはならない。

彼は1948年にチュービンゲンで行った講演の中でも、教育者の理想像を追求している。紹介してみよう。

- ①教育者は文化に対して健全な意志をもつべきである。
- ②教育者は構造心理学に立って、子どもを静的にも動的にも捉えることができなくてはならない。
- ③教育者は若い生を包括的な全体的な構造の中で位置づけ、発達相の構造に適合させるために、情熱を失うべきではない。
- ④教育者は正しい価値への愛と子どもに対する愛とを行使すべきである。
- ⑤教育者は意図的な教育活動と無意図的な教育活動との本質的な違いを理解しておくべきである。
- ⑥教育者は価値や善を前提に、当為のもとで自己を創造することを忘れてはならない。
- ⑦教育者は良心の覚醒の原理を知っておくべきである。
- ⑧教育者は人格形成することを倫理的職務としてさらには道徳的職務として受け止めるべき

である。

つまり、シュプラランガーのいう理想の教育者は「生まれながらの教育者」に到達するように努力する者であることが理解される。

ここで述べた教育者のあり方は、そのまま、人間のあり方や人間の生き方にも通用するものである。あらゆる分野への応用が可能であることは、ある種の普遍性を意味している。それらの内容は、人間の道として検討するに値するものである。

第四節 シュプラランガーの教育観(2)

1 教育方法論(1)

彼は教育方法論に関して、次の3つを示している。

- ①いろいろな方法の選択は、無意識的にあるいは意識的に、世界観的な根本態度から生じてくる。
- ②陶冶財は精神的な内容、すなわち、特殊な歴史的時代状況の精神的な内容に拘束されている。
- ③精神科学上の理解は、研究者個人の精神的な広さ（能力）と成熟度（精神の充実度）とによって拘束されている。

解説を加えておこう。

まず、①に関して。歴史上、それぞれの時代にはそれぞれの教育家が登場し、いろいろな方法論を展開している。コメニウス、ペスタロッチ、フレーベル、モンテッソーリ、デューイ、マカレンコ、ヴィゴツキー、モウレンハウワー等はいろいろな方法を提示した。教育者は、いま現に教えている子どもの能力を前提にして、上記の人々の方法論の中から選択しなければならない。教育者は自分の考え方に従って選択しなければならない。そのとき、教育者に必要なことは、目的の内容と子どもの能力と方法論の特徴を知悉しておくことである。世界観的な根本態度は、日ごろからこれらの3つの項目について情報を収集しておくことから生まれてくる。

次に、②に関して。人類が共有している精神的な内容は、あらゆる人々に認められた客観的な価値や意味でまとめられている。人類が共有している精神的な内容は、時代の発展とともに、減ることなく、増え続けている。そのような状況の中で、教育者が子どもに教える内容は、教科書の中にコンパクトに収められている。しかし、教える内容は、時代の精神によって増やされたり削られたりしている。また、教える内容は、それぞれの国家の考え方によって、増やされたり削られたりしている。つまり、子どもに教えるべき内容は、特殊な歴史的時代状況の精神的な内容に継続的に左右されているのである。

そして最後に、③に関して。授業において、教育者は子どもに対して、教科書の中の内容を

理解した範囲でしか教えることはできない。その内容を狭く深く理解している場合は、狭く深く教えることができ、その内容を広く浅く理解している場合は、広く浅く教えることができる。両者の選択は教師の考え方に依存している。また、教育活動は教育者と子どもとに直接的な人間関係のもとで行われているため、人格形成の程度が子どもに直接影響を与えていく。穏やかな人柄は子どもの人格を穏やかにしてことが考えられ、逆に、短気な人柄は子どもの人格を短気にしていくことが考えられる。子どもにより影響を与えるか与えないかは、教育者の人柄の良し悪しにかかっている。教育活動が直接的な人間関係の中で行われるゆえに、教育者の成熟度が問われるのは当然なことである。

2 教育方法論(2)

上記のように、方法の選択が教育者の世界観に委ねることから、シュプランガーは二者択一の関係の中で次の四つの方法を導き出している。

- ① 孤立的な方法と世間に近い方法
- ② 自由の方法と拘束する方法
- ③ 先を見越す方法と発達に即した方法
- ④ 画一的な方法と個別的な方法

①に関して。孤立的な方法とは、時代精神に逆らい、心理的な圧迫を感じさせる陶冶財を選び、より高い規範を必要としない方法をいう。したがって、この方法では、純粋な人間が形成される。他方、世間に近い方法とは、時代精神に迎合し、心理的な解放を旨とする陶冶財を選び、比較規範を必要としない方法をいう。したがって、この方法では、現実的な人間が形成される。

②に関して。自由の方法とは、自己活動や自己衝動を完全に認める方法のことをいう。自由意志に任せるため、秩序のない放任が蔓延するであろう。他方、拘束する方法とは、自己活動や自己衝動を権威によって圧迫していく方法のことをいう。権威によって拘束し締め付けるため、自由への飛躍は起こりえないことが予想される。

③に関して。先を見越す方法とは、子どもの心理学的な発達を無視して、文化への共働のために、できるだけ早く、精神的な成熟を望む方法をいう。したがって、そこには同化されない文化財や教材が続出することになる。他方、発達に即した方法とは、子どもの心理学的な発達に完全に即して、「あらゆるものを子どもから」をモットーにする方法をいう。子どもの発達に即しているため、時間が無駄にされ、子どもの高き姿への発展は望めない。

④に関して。画一的な方法とは、個のもつ独自の法則、すなわち、個性を無視する方法をいう。画一な方法であるにもかかわらず、あらゆる者は同等に反応しない。他方、個別的な方法とは、個のもつ独自の法則、すなわち、個性を尊重する方法をいう。この方法では、教育が公

的で社会的な仕事であるという性格を完全に失ってしまうことになる。

それぞれの方法には一長一短がある。両極端をしめしたのがこれらの方法である。両極端の間の中でどこの目盛りに合わせるかは、教育者に任されている。まさしく、方法の選択においては、教育者の腕の見せ所であるということになる。

3 教育方法論(3)

彼は『小学校の固有精神』(1955)の中で、小学校での方法原理を導き出している。それらは、①直観の原理、②労作の原理、③共同社会の原理、④範例教授法、⑤生活接近の原理、そして⑥内界覚醒の原理、である。

①直観の原理：直観とは、興味や関心のもとで、対象の特徴を捉える能力のことをいう。シュプラランガーは直観を単なる感性的、受動的なものと捉えず、受け取ったものを自己の中に内面化すること、能動的に理解することの働きと捉えている。すなわち、直観とは、感性によって対象の外面だけではなく、その内面までも捉える機能のことをいう。彼は、人間のもとももっている本性の中に、何か精神的なものまで明らかにしたい、努めて生み出そうとしたい意志を認めて、直観を定義づけている。

②労作の原理：労作の原理は、思考と行為とをできるだけ密接に結び合わせなければならないとする原理である。とかく教育は書物主義、詰め込み主義に陥り、その内容さえ身につけ、テストに良い点を取りさえすればそれでよいとする考え方があるが、しかし、それでは、内容を応用したり活用したりする段階にまで至らず、結果的には、内容は生かされていないことになる。内容を実践や行動に結びつけ、実践・行動に即して発達させようとする考え方が労作の原理である。シュプラランガーは労作によって、論理的な思考の学習に発展していくような形態まで考えている。

③共同社会の原理：結びつきを前提に、より深い力で相互に助け合っていく原理を共同社会の原理という。この原理では、共同での討論、うまくかみ合った議論、いろいろな角度からの照合、共同思考によると統一、すべての人における共有が主要な内容となる。

④範例教授法：教材の過剰化による子どもの精神的な負担を軽減するために考え出された方法、それが範例教授法である。範例教授法とは、教材の中で基礎的なものや本質的なものを範例として位置づけ、それを理解・定着させる方法である。この方法では、その周辺にある内容の理解を本人に任せるため、単に物知りにするのではなく、知恵ある状態に導くことが可能になる。

⑤生活接近の原理：生活接近の原理とは、居間における親子間でのコミュニケーションによって内容が自然に習得され、習得された内容が同心円的に拡大化していく原理のことである。ペスタロッチの「生活圏の原理」がこれにあたる。シュプラランガーはこの原理によって、子どもたちが内容を無意図的にしかも大きな負担を覚えることなく、いわば軽々と吸収していくため

に、この原理を小学校の重要な基本原理の一つとして位置づけている。

⑥内界覚醒の原理：この原理は、生命の調整器、すなわち、良心を目覚めさせる原理のことである。シュプランガーは良心を人間の心の最内奥にあり、各自の行為を裁きかつ正す倫理的な場所と捉えている。彼によれば、人間は良心の声に目覚めてこそ、真に自律的な、自由を獲得した存在になりうる。彼は、子どもに先天的に備わっている良心を覚醒させることに最も重要な教育の役割を認めている。彼の良心の覚醒論は、ペスタロッチのそれから大きな影響を受けている。

人間の五感による、とりわけ視覚による対象の把握力は驚異に値する。直観教授の本質が見直されなければならない理由がここに発見される。吸収されたものがたとえ主観的なレベルで終わってしまうかもしれないとしても、授業中、自由な、元気のよい、いろいろな角度からの当てずっぽうが許されるべきであろう。主観的レベルで終わっているがゆえに、次の段階へ発展する可能性を多く秘めているから。

労作すること、働くことは手足を動かすことであるが、その過程において、同時平行的に、思考力、想像力、創造力、推理力、判断力などの力を機能させている。労作・労働の価値は、精神的諸能力の活用にある。理論と実践とを結合させることは、人生の大きな課題でもある。その意味で、労作・労働はみなおされなければならない。

人間は、一人で生きていくこと、自給自足で生きていくことは難しい。したがって、能力の出し合いによる協力、共同、協働、協同、助け合いが自然の成り行きとなる。教育の目的が個性形成と社会性形成となっているのは、得意とする分野での能力形成とそれに基づく出し合いを意味している。

いかなる分野でも、基礎・基本さえ身につけておけば、応用や転用は、意志さえあれば、いとも簡単なことになる。なぜなら、内容は、基礎・基本をベースにしながらかircular的に拡大しているからである。

人間は、どこからともなく聞こえてくる自らのことばに耳を傾け、知らず知らずうちにそれに答えている。それが自問自答である。この自問自答は青少年の時代に生起する。自分と本格的に関わりはじめて以来、その関係は途中で途切れることはない。内面における良心、究極的には神もしくは神の声とするシュプランガーは、良心をあえて教育しようとするのではなく、良心が覚醒してくるまで「待ちなさい」と示唆している。直接教えることができないからである。

(引用・参考文献)

- 1) 山崎英則『シュプランガー教育学 重要用語小辞典』溪水社、1987年。
- 2) 山崎英則編『シュプランガー教育学へのいざない』近代文芸社、1996年。

精神科学的教育学から人間の本質を捉える

- 3) 山崎英則『シュプランガー教育学の基礎研究』学術図書出版社, 1997年。
- 4) 山崎英則他編『道徳と心の教育』ミネルヴァ書房, 2002年。
- 5) 山崎英則編『教育用語辞典』ミネルヴァ書房, 2004年。
- 6) 山崎英則『シュプランガー教育学の研究－継承・発展過程と本質理論をたずねて－』溪水社, 2005年。
- 7) 山崎英則編『教育哲学のすすめ』ミネルヴァ書房, 2006年。
- 8) 山崎英則編『教育哲学へのいざない－教育の再構築と教育思想の展開－』学術図書出版社, 2007年。